

# さまざまな肺炎とマイコプラズマ肺炎

監修：山口内科 院長 山口 泰 先生

## 肺炎とは

肺炎は肺の中に炎症が起きて呼吸が困難になる病気です。

癌や老衰のほか、大きな手術をした後に併発したり、風邪をこじらせたときにも起こる二次的な病気としても知られ、誰でもなりうるものです。

幸いにも抗生物質が進歩したため、昔ほど怖い病気ではなくなりましたが、肺という酸素を取り込む大切な臓器に障害が起きるため、死につながることも少なくありません。その証拠に肺炎は日本人の死亡原因の第4位で、これは癌、心疾患、脳血管疾患に次ぐものとなっており、恐ろしい病気に変わりはありません。

肺炎の多くは細菌感染によるものですが、肺結核、ウイルス、免疫異常などさまざまな原因があるため、一括しにくい病気です。

## 肺炎の種類

肺炎は通常、風邪→気管支炎→肺炎というように、こじらせた上気道の炎症がどんどん奥へと広がって起こります。

その炎症の起こる部位によって、肺炎は大きく2種類に分けられます。

### ■肺胞性肺炎

一般に肺炎というと、肺胞性肺炎のことを指します。肺胞性肺炎は口から入った細菌が気管を通して先端部分にある肺胞(吸い込んだ空気が入る袋)の中に入り、繁殖して化膿したことが原因で起こります。熱が上がりに

咳とともに膿ともいえる痰がどんどん出るのが特徴的な症状です。

代表的な原因菌として、「肺炎球菌」、「インフルエンザ菌(ウイルスではありません)」などがあります。

また、細菌以外に、食べ物と空気をそれぞれ食道と気管に振り分ける喉の働きがうまくいかず、誤って飲み込んだ食べ物や痰を肺へ吸い込んでしまった場合に起こる肺炎を「誤嚥性肺炎」といいます。

幼弱者や高齢者は誤って気管に入っても、うまく咳で外に吐き出すことができない場合が多いため、この誤嚥性肺炎になりやすい傾向があります。

### ■間質性肺炎

間質性肺炎は、肺胞と肺胞の間にある間質という隙間の炎症が原因で起こります。

間質には血管や気管支が通っており、心臓からくる肺動脈から二酸化炭素の多い静脈血が流れ込んで、吸い込んだ酸素と入れ替えるガス交換の作業がここで行われています。そのため、間質が炎症によって腫れて分厚くなると、酸素と二酸化炭素の交換がうまくいかず、息切れなどの呼吸困難につながります。

代表的な間質性肺炎には、「マイコプラズマ肺炎」、「ウイルス性肺炎」などがあります。そのほかにも、放射線や薬による間質性肺炎、アレルギー反応による過敏性肺臓炎、原因不明の特発性間質性肺炎などがあります。

一般的な肺炎と異なるため、間質性肺炎は「非定型肺炎」とも呼ばれます。普段の生活の中でかかる肺炎を「市中肺炎」といいますが、非定型肺炎はこの市中肺炎の20～30%

を占め、その多くがマイコプラズマによる肺炎であるため、マイコプラズマ肺炎はありふれた肺炎と言えます。

## マイコプラズマ肺炎とは

マイコプラズマ肺炎とはマイコプラズマという、細菌とウイルスの中間の大きさの病原体に感染して起こる肺炎です。

普通の肺炎に比べて症状が軽くすむ場合が多く、一見風邪のような症状なので、なかにはマイコプラズマ肺炎と気がつかずに過ごしてしまう場合もあります。しかし、まれに重症化したり、他のウイルスと混合感染したりすることもあるため、注意が必要です。また、マイコプラズマに対する免疫は一生続くものではないため、繰り返し感染する可能性があります。そのため、一度かかったからといって油断してはいけません。

マイコプラズマ肺炎は学童から青壮年(10～30歳代)に多く発症する傾向があります。流行期には乳幼児も発症しますが、肺炎にはならず、上気道炎ですみます。5歳以上になると、肺炎だけでなく髄膜炎につながることもあります。

咳やくしゃみなどによる飛沫感染で、学校や職場など人が集まる場所で流行します。感染力も強いため、1歳までに40%、5歳までに60%、成人するまでには約97%が感染しているといわれています。

以前は4年周期の流行のため、「オリンピック肺炎」などと呼ばれていたこともありましたが、近年、その周期の特徴は崩れてきています。季節も初秋から冬に多く見られていましたが、最近は季節性が無くなってきていることもあり、秋や冬だけでなく一年を通して見られるようになりました。

### ■症状

潜伏期間はおおよそ2～3週間ですが、6日～1ヵ月ともいわれ、幅が広いためにいつかかったかはつきり分からない場合もよくあ

ります。潜伏期間後には頭痛、倦怠感、発熱、咽頭痛などの症状が出ます。

風邪と症状が似ているため、区別されにくいこともあります。マイコプラズマ肺炎の場合には鼻水は目立たなく、激しく乾いた咳が続きます。熱や咳がひどいにもかかわらず、痰があまり出ないことも特徴です。

マイコプラズマ肺炎の症状は個人差がかなりあるため、2～3日で治る場合もあれば、1ヵ月と長引く場合もあります。

症状が出てから完治するまで咳はしつこく続きます。他の人にうつさないためにもマイコプラズマ肺炎の疑いがあったら、すぐに病院へ行って診断してもらいましょう。

### ■診断と治療

聴診や問診などに加えて、肺炎の診断の決め手になるのは、胸部のレントゲン写真です。

肺胞性肺炎は、肺胞の中に膿が溜まってむくんでいるところが白く写ります。全体的に白く濃いのがつぱりとした影が出るのに対し、マイコプラズマ肺炎は肺胞の周りの間質に炎症が起きていることから、全体的ではなくまだらに白く淡い影が出るのが特徴です。

主に内服薬で治療し、レントゲンと血液検査で効果判定をします。

体調が回復してきたら、医師と相談して登校時期を決めましょう。それまでは他の人への感染を防ぐために自宅で療養し、外出は控えます。

## 肺炎球菌ワクチンとは

肺炎球菌ワクチンは、すべての肺炎に対する予防接種ではなく、肺炎球菌による肺炎に対するワクチンです。そのため、マイコプラズマ肺炎などの肺炎球菌以外の肺炎には効きません。

【参考HP】  
・『山口内科ホームページ』(<http://www.yamaguchi-naika.com/>)

【参考資料】  
・『わかって治す 家庭の内科学 家庭の病気は内科が9割! ?』  
編者/山口 泰 発行/ごま書房